

慶應義塾と福澤諭吉——今、改めて学ぶ



慶應義塾は福澤諭吉が開いた学塾。私立大学は創立者の建学の理念を形づくることを目的としているといっても過言ではありません。慶應義塾を知るには、まず創立者・福澤諭吉を知ることから始めましょう。福澤は、教育者としての顔のほかに西洋の文化や思想をいち早く日本に紹介する先見性を備え、日本の近代化に大きく貢献した時代の先導者としての顔も持っていました。

はじめに

今、もう一度見直したい 義塾と福澤諭吉

福澤諭吉は、単に母校の創立者というだけでは語れない。例えば一万円札。なぜ日本の最高額紙幣の肖像に福澤が選ばれたのだろう。それはどのような功績によるのだろうか？

ひとことでは言えませんが、幕末から明治初期の不安定な大変革の時期に、日本の近代化に稀有な貢献をした思想家・教育者だからである。自由・平等の尊さ

と学問の大切さを、『学問のすゝめ』をはじめとする著書で説き、他の著作においても西洋文明を紹介しながら文明開化の重要性を訴えた。

活動は文筆にとどまらない。演説の概念を日本に持ち込み、「演説館」で実践し、広めたのも福澤である。また地位や職業を超えて人々が交わり、「知識を交換し世務を諮詢する」ことを目的とした日本最古の社交クラブ「交詢社」を設立した。「世務」とは取引、起業、金銭貸借など、さまざまに生じる人と人の相互関係を指

し、「諮詢」とは、その関係を円滑に動かすための相談を意味する。多彩な日本の知識階級が交詢社の社員（メンバー）となり、全国各地へ啓蒙と入会勧誘を進めるべく巡回演説会を開催し、機関誌『交詢雑誌』も創刊した。

また福澤は、1882（明治15）年に日刊新聞『時事新報』を創刊し、経営にあたった。創刊号ではあらゆる党派や利害から離れた立場（独立不羈）から発言することを宣言し、社説を舞

台に、さまざまな言論活動を展開した。

交詢社と時事新報は慶應義塾とあわせ、世に福澤の三大事業とされている。なかでも常にその活動のベースにあったのが慶應義塾であった。1896(明治29)年に行った演説をもとにした「慶應義塾の目的」と呼ばれる一文があり、慶應義塾の目的は「我が日本国中に於ける気品の泉源、智徳の模範」を指すことにあるとし、教員、塾員、塾生ら社中に「全社会の先導者」となることを期待している。

その目的は、今も変わらない。福澤の義塾への思いに応え、さらに未来へ伝えていくことが、義塾に学ぶ意味であり、また喜びである。福澤がその生涯を終えてからすでに114年、義塾の歴史は紡がれ続けている。



01

慶應義塾発足の理念、「自我作古」

1835(天保5)年に生まれ、1901(明治34)年に亡くなった福澤諭吉は、江戸末期と明治つまり近世と近代2つの時代を生きた思想家、教育者として、多くの言葉や発言を著作や記録に残しています。

たとえば、新入生はこれからさまざまな機会に、独立自尊、半学半教、社中協力、躬行実践などの四文字熟語に触れることになると思います。それら四文字熟語の中で、私が慶應義塾の理念として最も重要と考えるのが、「自我作古(じがさっこ)」です。中国の『宋史』に見える熟語で、「我より古を作す」の意味を持っています。

1868(慶応4)年、福澤は、それまで正式な名称を持たなかった私塾を「慶應義塾」と命名し、近代的な学校として発足したことを宣言する『慶應義塾之記』を発表しました。その中で、洋学の先駆者である前野良澤、桂川甫周、杉田玄白らの努力に触れ、「只管自我作古の業にのみ心を委ね」と称賛し、義塾が洋学の学びを引き継ぐ決意を示しました。

自我作古の真意は、自らが開拓者となり、後世に影響を与え続けるということではありません。自らの仕事を基礎として、あとを継ぐものが自分を乗り越え、自分が過去、古になることを受け入れる勇氣ある言葉なのです。後輩が次々に未来を切り開き、限りなく前進することを期待し、これを可能にする場として福澤は慶應義塾を創ったのだと思います。

慶應義塾の歴史は、人から人へ、知のリレーでつくりだされてきたのです。

新入生の皆さんは、自我作古を基本理念として誕生した慶應義塾の一員として、努力を惜しまずに勉学に励み、先輩たちを乗り越える業績をあげ、また自らを乗り越える後輩たちの頑張りを喜ぶ人になっていただきたい。

そしてなによりも、慶應義塾と結びれた皆さんのこれからの人生がますます輝き出しますよう、お祈りしています。



福澤研究センター 所長・
法学部 教授
岩谷十郎

02 創立者 福澤諭吉のエピソード

おなじみ

一万円札の肖像画

福澤の肖像画が使われた一万円札が発行されたのは、1984（昭和59）年11月1日。明治期を代表する文化人として選ばれたもので、同時に五千円札には新渡戸稲造、千円札には夏目漱石の肖像画が採用されている。2004（平成16）年11月の紙幣刷新で、肖像画は五千円札が樋口一葉、千円札が野口英世に変わったにもかかわらず、一万円札は引き続き福澤のまま現在に至っている。

新旧どちらの一万円札も、1号券は日本銀行貨幣博物館に収蔵されているが、「A000002A」の記番号を持つ2号券は、義塾に寄贈され、大切に保管されている。



こんな言葉も

福澤の訳から生まれた

福澤がスピーチを「演説」、ディベートを「弁論」「討論」と訳したことは広く知られている。これは、日本では広く知られるのに先立ち、西洋に於いて、口頭で意見を述べる習慣を根付かせるためだった。1875（明治8）年には、演説会のために、現在も三田キャンパスに残る「三田演説館」が造られた。

そのほか、福澤が訳した外国語は多い。たとえば1860（万延元）年の渡米時には英語・中国語の辞書を購入し、日本語訳と発音をつけた『増訂華英通語』を出版。その中で、「Curry」の項はカタカナで「コルリ」と記され、これが現在の「カレー」となった。



福澤諭吉 年表

- 1835年 1月10日（天保5年12月12日）大阪玉江橋北詰中津藩蔵屋敷に生まれる。
- 1854年 蘭学を志して長崎に出る。
- 1855年 オランダ語の初歩を学ぶ。
- 1858年 緒方洪庵の適塾に入門。
- 藩の命令で江戸に移り、築地鉄砲洲奥平家中屋敷の長屋の一軒で、蘭字の家塾を開く。「**慶應義塾の起源**」
- 1859年 横浜にて、これまで学んだオランダ語が役に立たないことを知り落胆。思い切った英語に転向し、辞書を頼りに独学を始める。
- 1860年 軍艦成臨丸に乗ってサンフランシスコに向かい、ハワイを経由して帰国。日本の船として最初の太平洋横断。
- その後幕府の翻訳方となる。
- 1861年 ヨーロッパ派遣の幕府使節の随員となる。
- 1866年 『西洋事情』初編
- 1867年 幕府の随員として再びアメリカに赴く。

無類の写真好きだった福澤諭吉

数年前、西郷隆盛の肖像は別人ではと話題になったが、明治期には写真撮影を嫌う人が少なくなかった。しかしながら、福澤は大の写真好きで、渡米した若い頃から晩年までさまざまな姿で写真に納まっている。



「福澤諭吉と米国少女の額入り写真」

1860（万延元）年・幕府派遣使節の一員として渡米する際、サンフランシスコの写真店で撮影された。



「福澤諭吉肖像」

1876（明治9）年5月・福澤41歳の壮年期の写真。



「福澤諭吉と令息令孫たち」

1895（明治28）年2月・場所は福澤が休息に訪れた大磯の招仙閣。



「散歩中の福澤諭吉」

1899～1900（明治32～33）年頃・塾生、護衛とともに散歩中。身長170cm以上と大柄だったことが見て取れる。

協力：福澤研究センター、慶應義塾図書館

1868年

家塾を鉄砲洲から芝新銭座に移し、時の年号にちなんで慶應義塾と命名する。5

月15日、上野彰義隊の戦の砲声を耳にしながらウエー

ランド経済書の講義を行う。

1869年

授業料の制度を初めて作る。

1871年

慶應義塾を芝新銭座から三田に移し、同時に転居。

1872年

政府から借用中の慶應義塾敷地の払い下げを受ける。

1874年

『学問のすゝめ』初編
三田演説会 発会。

1875年

三田演説館開館。

1880年

『文明論の概略』
交詢社を起す。

1882年

時事新報を発刊。

1890年

大学部が設置され、文学・法律・理財の3科を置く。

『大学部の発足』

1892年

北里柴三郎を援助し、伝染病研究所の設立に尽力する。

1896年

『福翁自伝』

1899年

『福翁自伝』

1901年

2月3日、三田慶應義塾内の自邸にて死去。

03 授業で知る福澤諭吉

福澤研究センター授業「近代日本と福澤諭吉」(西澤直子教授・都倉武之准教授担当)

入学時に配布された『福翁自伝』に、滑稽なエピソードが満載されているように、福澤諭吉は、知れば知るほど興味がわく人物です。「近代日本と福澤諭吉Ⅰ」(春学期・日吉開講)の授業では、福澤の生涯と義塾の歴史を通じて、福澤の思想や理念を知るとともに、義塾が果たした役割について考えます。当時の写真も多用し、興味深いエピソードとともに語られています。

「福澤は、あくまで民間に身を置きながら、政府に意見を言い、批判もする。理想主義と現実主義の間で、揺れ、悩みながらも、優れたバランス感覚で、日本を良くしたいとのスタンスを貫きました。義塾には、官界に進むには不利なことを承知のうえで、国づくりにより大きな理想を抱く人々が集まりました。塾生には、自分がその歴史に連なっていることに、誇りと自信を持ってもらいたい」(都倉武之准教授)

履修者からは、「グローバル化が進んでいる現在では当然のことを福澤は先読みして、当時は風当たりが強かったらだるうことを言い、実行しました。」



日本が大きく変わった明治時代に福澤が考えたこと、なしたことをもっと知りたい」(小川昭人君)。「英語のディベート活動

をしており、日本でディベートを始めたのが福澤と知って興味を持ちました。周囲のことを気にせずどんどん行動する福澤には、共感するし、勇気ももらえます」(倉田芽衣君)といった声が聞かれました。



経済学部1年 小川昭人君



経済学部1年 倉田芽衣君



福澤研究センター准教授 都倉武之

他の授業や記念碑などで知る福澤諭吉

他に福澤諭吉について学ぶ授業として、湘南藤沢キャンパス(SFC)で行われている「慶應義塾入門」(春学期開講)という授業があります。こちらは新入生向けに、慶應義塾での勉学と生活の意義を考える契機となることを意図し、慶應義塾と福澤について複数の教員や塾外講師が担当する連続講演の形式となっています。これ以外にも、福澤を取りあげている授業や研究会(ゼミナール)は多くありますので、講義要綱で探してみるのもいいでしょう。

また、三田キャンパスにはかつて福澤の邸宅があり、最期の時を迎えた場でもある邸宅の跡地、現在の図書館(新館)東側には、「福澤諭吉終焉之地記念碑」が建っています。この記念碑や、各キャンパス(三田・日吉・SFC・信濃町)にある福澤の胸像などにより、あらためて創立者である福澤に思いをはせてみてはいかがでしょうか。



福澤諭吉終焉之地記念碑



信濃町・大病院中央棟の胸像

04

もっと知りたい義塾と福澤諭吉

知るほどに、さらに興味がわき、もっと知りたくなるのが福澤諭吉であり、義塾の歴史だ。福澤の著作は膨大にあり、生前の1898（明治31）年刊行の『福澤全集』に始まり、全集だけでも4種類が出ている。今回は福澤の著作の中から、今でも手に入れやすい、代表的な3編を紹介する。文庫版や現代語訳が出ているものもあるので、興味に合わせて探してみたい。

『学問のすゝめ』

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずといへり」で始まる明治時代のベストセラー。初編から17編まで1872〜1876（明治5〜9）年にわたり断続して刊行された。人間の自由と独立、その前提となる実証的・合理的精神を築くための「実学」の重要性が、当時としては画期的な読みやすい通俗文で書かれている。旧弊を打破する気概に満ち、文明開化期の世の中を大いに刺激した本である。



『福翁自伝』

福澤を知るための、いわば入門書。下級士族の次男に生まれ、門閥制度は親の敵^{かたみ}との信念のもと、蘭学に出会い、3度の欧米渡航の機会を得て、義塾の創立、時事新報の経営など、福澤の波乱に富んだ生涯を口述と訂正加筆によりまとめている。維新変革期の時間軸に福澤の人生が交差する展開は、幕末明治の時代史として興味深い。

『文明論之概略』

福澤の代表的著作といふことのみならず、近代日本の古典ともいふべき東西文明論。1875（明治8）年刊行。西洋文明の本質を論じ、日本の文明化こそが独立達成の唯一の道であることを説いた。『学問のすゝめ』に比べ硬い文章で書かれているのは、儒教に凝り固まっている旧弊な知識人に読んでもらい、西洋文明の精神の導入への理解を得るための方策だった。



ホームページ「慶應義塾豆百科」

福澤と義塾のこと、あれこれを気軽に知るには、義塾ホームページの「慶應義塾を知る・楽しむ」から「慶應義塾豆百科」のページへ進むのもおすすめ。端から読んでも、アトランダムに読んでも楽しめる。
<http://www.keio.ac.jp/ja/contents/mamehyakka/>

05

一貫教育校での取り組み

一貫教育校でも、福澤や義塾の歴史についての教育の機会を数多く設けています。例えば、幼稚舎では1988年から毎年、歩く会の部員や6年生有志が「36キロチャリティウォーク」に参加します。昨年は100名を超える参加者が、福澤が実際に歩いた道のり（築地〜横浜）を約11時間かけて歩きました。また、横浜初等部には福澤の理念や義塾の歴史に触れることができます。「福澤先生ミュージアム」があります。その他の学校でも、講演会や福澤ゆかりの地を訪ねる旅行などが行われています。



横浜初等部の「福澤先生ミュージアム」